

石井寛治・中西聡編

「産業化と商家経営」

中山 富広

本書は大阪府貝塚市の米穀肥料商廣海家の一八三〇年代から約一世紀にかけての総合的な経営分析を行ったものである。本書はⅢ部一三章に序章と終章が付けられているが、まず序章「商家経営の展開と産業化」(石井寛治・岡田光代・中西聡執筆)と終章「総括と展望」(中西聡執筆)を読む方が、本書の意図と廣海家の全体像を把握しやすい。本書の第一の課題は、廣海家の商業活動とその損益の推移を具体的に明らかにすることである。この課題には近世的な問屋と仲買が近代になってどのように変容していくかという商人資本の性格究明の意図がある。第二の課題は、廣海家が獲得した利益が株式と不動産に投資された実態を明らかにすることである。これは従来、株式投資は税制の変化や、また地方名望家としての経済外的動機によるところが大きいとされ

てきたが、廣海家の場合は経済的動機によるものであり、このような商人による投資が「産業化」にいかなる役割を果たしたかを意図するものである。そして第三の課題は、廣海家の経営活動と大坂（阪）湾岸地域の経済発展との関連性を明らかにすることにある。これらの課題を説明するため三部構成がとられている。

第Ⅰ部「廣海家の経営展開」は第一と第二の課題に関連する。

第一章「収益基盤の転換と多様化」（中西聡・花井俊介執筆）は、廣海家の経営展開を論ずる前提として収益基盤を明らかにしている。幕末・明治前期は米穀と肥料の収益が中心で、その収益は口銭収入から仲買的な自己勘定取引へと比重が移った。明治中後期も依然として肥料を中心とした商業部門が中心であったが、後期になると有価証券部門に収益基盤が移り、大正・昭和戦前期にはさらに株式収益の比重が高まるとともに、不動産事業など収益基盤は多様化したことが明らかにされている。

第二章「営業支出と店員の活動」（二谷智子執筆）は、二〇世紀初頭まで営業費と家計費が明確に分離していなかったこと、

廣海家が多角化を遂げると、それに応じて店員同士の情報交換が進んだことを明らかにしている。

第三章「商業経営と不動産経営」（中西聡執筆）は肥料を取り扱い、幕末・明治期に自己勘定取引、産地直接買付、小売業へと商業的蓄積基盤が移り、大正・昭和戦前期には人造肥料の取引が中心となるものの、なおも魚肥の取引も盛んであったこと、また一八八〇年代から耕地取得を開始するが、地主的経営を拡大する意図はなく、これらの不動産投資は家業の肥料商を補完する目的であったことを論じている。

第四章「明治期の有価証券投資」（中村尚史執筆）は、廣海家が日清戦後期から積極的に地元企業の成長を支え、一八九〇年代後半以降は商業を原資とする投資から株式所得と役員報酬・賞与を原資としたことを明らかにしている。

第五章「大正・昭和戦前期の有価証券投資」（花井俊介執筆）は、廣海家の投資がさらに拡大し投資原資の約八割が株式収益で調達可能であったこと、同家の投資が経済合理的投資であったとし、そしてこのことが地域の工業化に貢献したと論じている。

第Ⅱ部「市場取引と廣海家」は廣海家の商家経営がどのような市場取引で実現されたのか分析するもので、第一章と第三章第一節・第二節を総論とすればいわば各論に当るものである。

第六章「米穀市場と廣海家の取引活動」（山田雄久執筆）は、北前船主や大坂・兵庫・堺の米穀商から仕入れていた廣海家が売買差益の方が多くなったこと（問屋業務から仲買的業務へ）、明治前期に次第に米穀取引から肥料取引へと重点を移していったことを明らかにしている。

第七章「廣海家商業の展開と全国市場」（落合功執筆）は、幕末期に荷受問屋業務を主体としていたこと、明治前期には入荷魚肥を買取る卸商（問屋兼仲買）となったこと、明治後期以降の廣海家の北海道直買りが停止されてからは大阪・兵庫で多様な肥料を購入するようになったことを、全国市場と後背地農村を取り結ぶ米穀肥料商としての視点から明らかにしている。

第八章「産地直接買付における情報伝達と輸送」（伊藤敏雄執筆）は、廣海家文書の電報と書簡を用いたユニークな分析で、函館や小樽での産地買付など取引形態が交通

通信手段の変化と密接な関係にあったことを明らかにしている。

第九章「廻船問屋廣海家の商業業務」(谷本雅之執筆)は、問屋でありながら自己勘定取引を行っていたことの意義を論じ、廣海家の取引範囲からの仲買の消滅、すなわち仲買が問屋・仲買業務を經營するなどの重要な流通構造の変化を指摘している。

第三部「地域経済と廣海家」は第三の課題に対応するものである。

第一〇章「幕末維新期泉南地域の肥料流通」(岡田光代執筆)は、廣海家が貝塚の最有力問屋の一つであったこと、維新时期に有力取引先が貝塚の干鰯仲買から小売商へと変わっていったことを明らかにしている。

第十一章「近代泉南農業の変容と廣海家」(井奥成彦執筆)は、泉南地域が米・玉葱・蜜柑中心の近代型商業農業へ変容しても魚肥の使用率が高かったこと、廣海家では小売業務が中心となり農家へ前貸販売の形をとり、昭和期には産業組合への販売比率を高めていったことを明らかにしている。

第十二章「近世後期の手形流通と両替商」(西向宏介執筆)は、廣海家の米穀・肥料取引の決済が貝塚・堺・大坂の両替商との手

形の受取・振込によって支えられていたこと、安政年間以降も大坂両替商宛の振手形が盛んに用いられて手形による決済の比重が高まることを明らかにしている。

第十三章「近代の金融システムと廣海家」(石井寛治執筆)は、これまでの両替商への振手形にかわって銀行を利用した為替送金や荷為替取組が行われたこと、そして廣海家が明治中期までの自己資本中心から銀行融資による産地買付・株式投資へと転換していくことを明らかにしている。

以上が本書各章の内容であるが、すでに与えられた紙数も尽きてしまった。評者はかつて近世の商家の経営史料を扱った経験があるが、複雑で膨大な廣海家文書からその資産や損益一覧が示されており、中西氏らがそれらの作成・分析にいかに莫大なエネルギーを費やされたことか、敬服の念を禁じえない。またこれまで紹介してきたように本書はたんなる論文集ではなく、各執筆者相互の連携がとれており、また評者のような門外漢が言うのも気がひけるが、各章で展開された実証的な問題提起は近代経済史研究に多大な影響を与えるであろう。とは疑いないであろう。

最後に、近世の商人資本はいわゆる「短期的資本」という概念の壁もあって、どちらかというところ「産業化」を妨げる存在として扱われがちであったが、「商家なくしては市場経済はうまく機能しない」という本書の視角はもちろん、肥料商としての廣海家が泉南地域の農業の産業化を支えたという事実などは近世史研究にも有用な視角となるべきである。

(なかやま・とみひろ、広島大学大学院文学研究科教授)

(A5判、五〇二頁、六六〇〇円、名古屋大学出版会、二〇〇六・二刊)